

## 式辞

窪舎の丘に流れる風の温かさに春の訪れを感じる頃となりました。本日、ここに、県教育委員会をはじめ多数の御来賓の皆様、御臨席を仰ぎ、鹿児島県立与論高等学校第五十五回卒業式を挙行できますことは、私たち教職員にとりましてこの上ない慶びであり、深く感謝申し上げます。

また、保護者の皆様におかれましては、卒業の日を迎えたお子様の姿をご覧になり、感慨もひとしおのことと存じます。心からお喜び申し上げますとともに、これまで本校に賜りました御理解、御支援に対して、厚く御礼申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与した四十五名の卒業生の皆さん、卒業おめでとう。

私と皆さんとの出会いは二年前の始業式でしたね。二年生に進級したばかりでまだまだ幼さが残る、中堅学年の責任を一身に背負わされた不安と緊張が入り交じったような姿でした。しかしその二ヶ月後、与論高校初の海外修学旅行、台湾への渡航を経験したことで、皆さんの表情はグッと引き締まりました。直に異国の空気を吸い、普段食さないものを食し、言葉の通じない人に囲まれ、異質な文化や歴史に触れるために国境を越えることで、間違いなく皆さんの経験値がワンランクアップしたことを同行した私は強く感じました。

皆さんは在学中、総合的な探究の時間「ゆんぬ」や「インターンシップ」、「しまの仕事フェア」などで、地域の自治体や事業所の方々の協力をたくさんいただいてきました。また、島外では東京大学や鹿児島大学などの先生方のみならず、卒業生をはじめこれまで

与論島に関わりを持った方々が様々な面から本校をサポートしてくださっています。地域に関わる方々がこんなにも幅広く、手厚く一つの高校を支えてくれている例を私は他に知りません。本校は制度上は「鹿児島県立」であるけれども、気持ちの上では「与論島立与論高等学校」なのだとも感じてきました。皆さんもこの有り難さを忘れないでください。島民みんなの高校、いや、島民だけではありません。与論島を愛するすべての人たちの高校が与論高校なのです。

そんな与論高校に在籍してきた卒業生の皆さんは、学校での学びの他に、貴重な若い労働力としてアルバイトやボランティアで地域に恩返ししてきました。特に二年次の十一月、この島を襲った豪雨災害では、水没して営業できなくなった事業所の復旧作業に多くの生徒の皆さんが自主的に参加してくれました。生徒たちにボランティアを募ろう

かと考えている矢先、すでに現地で作業しているという報告を受けたときには、校長として非常に誇らしく思いました。本当にありがたい。高校時代のこのような経験の積み重ねが、これからの社会を生きる皆さんの行動指針になることは間違いありません。

どうして皆さんがこのような行動をとれるようになったのか。その答えは本校の教育だけにあるわけではありません。このような行動は一朝一夕に高校だけで身につくものではないからです。当然のことながら、こども園から小中学校での教えもあるのですが、私が感じるのは与論島の「島是」・「誠」が大いに関係していると思っております。純粹で素直な心で何事も誠実に物事にあたる。それをご両親や祖父母、曾祖父母をはじめとする皆さんのご先祖様から引き継いでいるからなのではないかと私は思うのです。だからこそ、そのような心の軸を引き継いでいる皆さん

んには、私がいとも言うように「自分のルーツに誇りを持って」生きて欲しいのです。一月、本校に交流に来た長崎県の奈留高校の生徒の皆さんが、皆さんのことを評して次のように言っていました。「与論高校生は、人をけなさない、人の悪口を言わない、そして優しい」と。たった四日間の交流でしたが、奈留高校生の若くてしなやかな感性が皆さんが持っている本質を見抜いたのだと思います。

この人間的資質が今、大人の世界で失われつつあります。しかも、世界をリードすべき超大国のリーダーたちさえもが、自国第一主義に走り、その利害関係から争いが絶えません。ロシアがウクライナに侵攻して早四年。未だに収束の目処は立っていないのです。

戦後八十年を迎えた今年の夏休み前、私は皆さんに提出を課さない宿題を出しました。

終戦記念日までに様々な特集番組も組まれるはずなので、節目の年に戦争と平和について改めて考えてほしかったのです。皆さんに宿題を課したからには自分もと思い、様々なメディアを注意して見ていたところ、終戦記念日の前日、八月十四日に千玄室（せんげんしつ）さんの訃報が飛び込んできました。

千玄室さんは茶人・千利休（せんりきゆう）の子孫で、京都の茶道・裏千家十五代家元を継承された方です。第二次世界大戦中、千さんは学徒出陣で海軍に入隊し特攻隊員に志願します。この時千さんは、時の権力者・豊臣秀吉の命令で切腹させられた先祖の千利休と我が身を重ね、「自分も十五代でまた切腹させられるのか」という気持ちになったそうです。寂しそうなお母様の顔がただただ心に浮かんだといいます。

千さんは特攻機のそばで、飛び立っていく仲間たちに茶会を開いたとき、彼らが立

ち上がり、「おかあさーん」と叫んだ声が耳の奥に残っていると云います。「おふくろに会いたいなあ」と言ってみんな涙しながら飛び立ち、そして帰らなかったそうです。仲間が次々と命を失う中、千さんには待機命令が続き、終戦を迎えます。

戦後、千さんは「茶を介し、敬いあって交流すれば、国同士も争わなくなるはず」という思いで、各国の要人に対し茶会を開き続けます。根底にあったのは仲間たちへの想いです。「八十年間慚愧の念に堪えず、私は生き残ってきた。お茶を勧め合う気持ち。アフター・ユー。どうぞ。どうぞ。本当の心のおもてなし。大事なことなんです。これを私は世界中に伝えてきている。『千よ、お前残ってな、お前のお茶で。武は負けたけど、文でやれ、文で勝て。』みんなの声が聞こえますよ」と語る千さんは、百二年の生涯を昨年閉じたのです。

この報道を見て私は、自分のルーツに誇りを持って生きること、肉親を含めご先祖様と想いを通わせ合うこと、そして、国籍・人種にかかわらず誠実な態度で謙虚に敬い合うことの大切さを改めて学んだ気がします。その素地を備えているのが与論島で育ってきた皆さんなのではないか。私にはそう思えてならないのです。だからこそ、「人をけなさず、人の悪口を言わず、優しい」のではないかと思うわけです。

私は趣味のウォーキング中、いくつもの墓地の前を通行することが何度となくあるのですが、その際は神社の鳥居を一礼してくぐると同様に、かぶっている帽子を取り、一礼して通行させてもらいます。皆さんのご先祖様のお墓があるかもしれないと思うからです。「与論高校校長の大倉です。皆さんの子孫を高校生としてお預かりしております。

頑張らせますので、どうか見守っていてください」という想いで通らせてもらいます。こんな想いになるのも与論島だからなのかもしれません。「誠」の心が人、自然、風土、文化の中に漂っていて、私の体が自然とそれを吸収し、反応しているかのようにです。私なりの「誠」の表現です。皆さんも「誠」の心を持っている証を、島立ちして出ていく社会で発揮し、平和な日本、そして世界を築いていってほしいと思います。千玄室さんが特攻で先立った仲間の想いに背中を押され、文武両道の文の領域で生涯を生き抜いたように、皆さんには「誠」の心を打ち出して人生を歩んでほしいのです。

そして、皆さんが成人してお酒が飲めるようになったらいつの日か、与論献奉をして語り合いましたよう。その頃の社会はますますグローバル化が進み、異なる国籍の人たちが入り乱れているかもしれません。で

あればなおさらのこと、その人たちも巻き込んで与論献奉をすればいいのです。千玄室さんのお言葉をお借りして、「島有泉を介し、敬いあって交流すれば、国同士も争わなくなるはず」の思いで語り合えば、これが世界平和の礎になるかもしれませぬ。そうすれば、与論献奉という文化そのものがノーベル平和賞を受賞するかもしれぬ。どこかの国の大統領が躍起になって欲しがっているノーベル平和賞をこんなにも簡単に手に入れられるとしたら、これほど痛快なことはないじゃないですか。これも、人間のベース、「誠」の心があればこそできることなのです。皆さんは、その「誠」の心を備えている。そのことに自信と誇りを持って、混迷極めるこの世界を力強く生き抜いてください。

最後に、卒業生の皆さんに吉野弘の『奈々子に』という詩を送りたいと思いま

す。父親の娘に対する思いを綴った詩です。皆さんのルーツをたどる際、皆さんに最も近い存在、つまり皆さんのご両親がどんな気持ちで皆さんを十八年間育ててきたのかを想像しながら聞いてみてください。そして、皆さんが将来結婚し、新たな命が生まれたときには、「そういえば高校の卒業式で校長先生が読んだ詩があったな」と思い出してもらえば、これ以上嬉しいことはありません。

『奈々子に』 吉野 弘

赤い林檎の頬をして  
眠っている 奈々子。

お前のお母さんの頬の赤さは  
そっくり  
奈々子の頬にいつてしまつて  
ひところのお母さんの

つややかな頬は少し青ざめた  
お父さんにも ちよつと  
酸っぱい思いがふえた。

唐突だが

奈々子

お父さんは お前に

多くを期待しないだろう。

ひとが

ほかからの期待に応えようとして

どんなに

自分を駄目にしてしまうか

お父さんは はっきり

知ってしまったから。

お父さんが

お前にあげたいものは

健康と

自分を愛する心だ。

ひとが

ひとでなくなるのは

自分を愛することをやめるときだ。

自分を愛することをやめるとき

ひとは

他人を愛することをやめ

世界を見失ってしまう。

自分があるとき

他人があり

世界がある。

お父さんにも

お母さんにも

酸っぱい苦勞がふえた。

苦勞は

今は

お前にあげられない。

お前にあげたいものは  
香りのよい健康と  
かちとるにむずかしく  
はぐくむにむずかしい  
自分を愛する心だ。

令和八年三月二日

鹿児島県立与論高等学校

校長 大倉秀心